

# ドン・ドレーガーの武道観に関する研究

柴田 直生（筑波大学）

## 1. 目的

本研究では、海外の武道研究者の嚆矢であったドン・ドレーガーの代表的な著作から「武道」を示す語として用いられている“bujutsu”、“budo”、“martial arts”、“martial ways”の用例を分析・考察することで、近年、武道の国際化に伴って顕在化してきた用語の翻訳に関する問題について紐解き、そこから彼の武道観をも解き明かしていくことを目的とした。

## 2. 研究方法

ドン・ドレーガーの代表的な著作の中で武道関連用語や、付随して記された文脈を抽出、データベースを作成し、ドレーガーがこれらの用語をいかに使い分けていたのか、また彼の武道観について詳細に分析・考察を行った。

## 3. 結果と考察

### 1) ドン・ドレーガーの生涯

ドレーガーは、米国・ミルウォーキー出身であり、幼少の頃に始めた武術・武道を日本やアメリカで生涯にわたって研究し、天真正伝香取神道流の稽古を始めとした修行の中で、技術はもちろん、礼儀作法を始めとした精神性にも深く通じていた。また、海外に赴きアジア地域の武の研究や日本の武の普及を行い、様々な武道種目の国際連盟の設立に貢献していた。

### 2) bujutsu・budo・martial arts・martial ways の使い分けについて

ドレーガーは自身の著作において、“bujutsu”は自己防衛のための戦闘体系であり、“budo”は自己完成を目指すための精神体系であるとし、区別していた。そのうえ、“bujutsu”と“martial arts”は同じ意味内容を示すものとしながら、武術の歴史や文化、精神性を表現するうえでは、“martial arts”は使用せず“bujutsu”の語を使用していた。また“budo”と“martial ways”に関しては、“martial ways”が使用

されている記述はほとんど見られず、彼は日本武道の本質を“budo”の語を通して伝えようとしていたことが推察された。一方、“martial arts”と“martial ways”の語は外国人読者に向けての投げかけや英文法的な用語の使い分けの場合に使用されていたことが明らかとなった。

### 3) classical bujutsu & budo と modern bujutsu & budo の区別について

ドレーガーは武術や武道を時代ごとに区分し、それぞれについて解説を行っていた。彼は武術について、“classical bujutsu”が戦場のどんな状況にも対応することを目的とした様々な武器を用いたものであり、“modern bujutsu”は警察が犯罪者などを制圧するために警棒や縄などを使用して行うものとして、それぞれの実戦性や精神的な要素に違いがあると考えていた。また、武道については“classical budo”が槍や長巻、薙刀などを含まず、剣道や居合道、柔術、弓道などをその対象とし、“modern budo”は江戸末期の柔術や沖縄の格闘術などから影響を受けた格闘術や銃剣道を含んでいるとして、それぞれの宗教性や競技性に違いがあると考えていた。

## 4. 結論

ドレーガーの武道観としては、日本やアメリカでの武の修行を通して、武の歴史や文化、精神性を重視するようになり、それらを“bujutsu”や“budo”という語を用いて自身の著作で表現していた。また現代の武術や武道を、中・近世に行われていたものと区別し、古典的な武術や武道の方が価値の高いものであると考えていた。

## 5. 主な参考文献

Donn F. Draeger,『Classical Bujutsu』Weather hill,1973  
Donn F. Draeger,『Classical Budo』Weather hill,1973  
Donn F. Draeger,『Modern Bujutsu & Budo』Weather hill,1974